

さざなみ

# 国語教室

さざなみ国語教室  
 第513号 2024年12月25日  
 発行者代表 吉永幸司  
 連絡先 大津市柳川2-11-5  
 TEL 077-522-1008  
 発行所 滋賀児童文化協会  
 NPO 現代の教育問題研究所

## 自分時間を大切に 西脇悦司

「自分時間」という言葉を耳にするようになりました。英語では「Me Time」と表します。意味は、「リラクセスして、自分のためだけの時間を過ごすこと」だそうです。この潮流から、最近の電車は自分だけの移動時間を過ごせるように、座席指定ができるサービスも提供されているそうです。

次女が小学四年生の時の話です。下校途中の電車内は混雑しており、優先座席が一つだけ空いていました。右足を捻挫していた次女は、どうしても立っていることができず、そこに座っていました。すると五十代くらいの女性が次女の前に立ち、「ここは優先座席なんだから小学生は座っちゃダメ

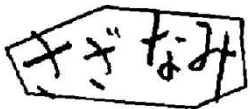
よ」と声をかけてきました。空いた座席を周囲の大人たちは座らず立っているのを見て、次女に優先座席の意味を教えてくださいました。私もしれません。そこへ同じ車両に乗っていた一学年上の長女が、その女性に言いました。「この子は私の妹です。妹は足を捻挫しているんです。足に包帯を巻いているのを見られましたか。なぜ座っているのか事情を妹に聞きましたか。」続けて、長女は、「〇〇ちゃん座っていいよ。あなたは病人なんだから。」と、次女に声をかけてあげました。この話を次女から聞いた時、長女がとった行動に対し、親として誇らしく思い、長女に心から、「ありがとう。」と伝

えました。家では姉妹の関係であり、学校では上級生と下級生の関係であり、また毎日同じ時間、同じ電車で通学する親友のように、親が知らない間に、二人はお互いを尊敬し合う関係になっていました。

「子どもがかわいいと思うなら、今は苦しくて失敗して泣いて構わないけども、子どもが一人で生きていく一番大事なときに泣かないようにしてやりたいと思います」

大村はま先生の言葉ですが、電車内の件で、長女は、論理的かつ丁寧な敬語で話すことで、大人は子供に対しても対等に接してくれることを知っていました。次女は、この出来事から、自分の言葉で相手に伝える大切さを学びました。学校は学問を修得する場であり、規範意識を育む場ですが、家庭での親の役割は、子供が精神的に自立した大人になるまでの伴走者であることだと感じています。子供が、無我夢中で目一杯の自分時間を楽しみ、失敗を重ねながら何度も考え、工夫してできたときは、何事にも代えがたい喜びがあります。そんな人間性豊かな子供たちが増えていくことを願います。

(大阪府在住・会社役員)  
 (京都女子大学附属小学校  
 卒業生保護者)



▼活字文化に親しんだ世代なので今でも気に入った言葉や文、文章には線を引く習慣がある。線を引くところは決まっていけない。初めて知ったことや覚えておきたいこと、いつか使ってみたい言葉等々。小説を含めた図書、雑誌やパンフレット情報誌等に線を引く。新聞の場合は切り抜きをする▼『成瀬は天下を取りに行く』(宮島未奈・新潮社)に興味を持ったのは、物語の始まりが、琵琶湖に接する滋賀県大津市の西武百貨店の営業終了という場面設定からであった。それは、なじみの店でもあった。思い出の始まりは開店の当時のこと。近くの小學校に勤務。開店日の混雑時に登下校の安全確保、職員会を開く等々の思い出が蘇ったこと。▼内容が、成瀬あかり(登場人物)が他人の目を気にすることなくマイペースで行動をするという生き様。それを、幼馴染の島崎を筆頭に立場も距離感も異なる人々の視点から描かれていく小説である。その中で、思わず線を引いたのは次の文章。「小学生のとき、国語の教科書の本文をひたすら書き写す宿題が出た。昔の人でもあるまいし、なんで手書きでわざわざこんなことをしないとならないのだと思っていた。先生が言うには、上手な文章を書き写すことで文章のリズムがつかめるようになるという。」登場人物が思い出す小學校の体験として「書き写し」と子供の気持ちを想像し暫しの時間を楽しむことができた。

(吉永幸司)

**漢字が苦手な児童に  
どのように関わるか**  
高木 富也

私の漢字指導は、個別最適で、協働的で、自由進度学習的である。これまでの機関誌では、漢字指導における「個別最適と協働的な学習」「二期の導入期」「自由進度学習」「漢字と自己調整」「学級開き」を五回に亘って述べてきた。今回は、漢字が苦手な児童に対してどのように関わっているかについてまとめる。

対象児童は、国語が苦手、特に書くことに対する抵抗感がある児童。書いている文字は平仮名中心で、拗音・促音などの間違いも多い。進級はじめの漢字テストでは、二割程度の正答率であった。児童に漢字について尋ねてみると、「俺、漢字わからへんねん。」という返答だった。

まず、苦手がどこから来ているのか、どのような漢字学習をしているのか、児童を観察することから始めた。漢字ドリルを書くことと自体は速いが作業的になっただけで、無言で眺めているだけのこと。時間が多分分かっていた。また、自由進度的に漢字の時間を設定すると、学習用タブレットでポチポチと指先で回答を押す作業ばかりをしていること、小テストを実施すると、「分からないから」という理由から空欄が多いことが見えてきた。そして、「自分が、どんな漢字学習をしているか説明できる?」と尋ねると、「え、分からへん。」という返答で、無自覚的に行っていることが判明し

た。つまり、学び方を理解していなかったのである。

そこで、学び方の意識改革から着手した。漢字ドリルは読み優先で行うこと、運書き・空書きなどで体を動かす運動性記憶の方が覚えやすく忘れにくいこと、漢字を個業にせず学級の協働的な学び合いに変えること、空欄を作らず書き続けることで思考が働くことなどである。これまでの経験上、多くの児童はこれらの指導で漢字の力が大きく伸びる。しかし対象児童は、漢字テストの点数が四割程度までしか伸びなかった。そこで次の手立てとして、漢字学習中に本児と対話することをはじめた。

部首クイズをして漢字の形を想起する、熟語の意味を確認する、文作りを会話形式で作るなど、様々な方法を飽きがないように繰り返しした。とにかく、黙って漢字を眺める時間を減らし、とことん話す、動くなどの運動性記憶や、エピソード記憶の時間を粘り強く増やしていった。

二期最後の五十問テスト。本児はなんと八十四点。進級時より五十点以上の伸び。「こんなに漢字できたん、はじめてや!」という笑顔が忘れられない。学級としては、本児の努力も大きく影響し、平均点九十五点、中央値九十八点、最頻値百点と素晴らしい結果となった。前述した手立ては、漢字が苦手な児童はもちろん、多くの児童にとっても効果的であるといえる。どんな指導方法も、まずは児童をよく観察し、理解し、それぞれに最適な手立てをうっていくことが何より重要であると感じた。

(東近江市立能登川南小学校)

**「にこにこ大きくせん」  
司削 裕之**

一年生の生活科で、「かぞくがにこにこするときは どんなどきか かんがえよう」というめあてで学習をした。「好きな食べ物食べている時」など、おうちの人が個人的に楽しい時間を過ごしているエピソードが出てくると予想していたが、子どもたちが教えてくれたのは次のようなことだった。

- ・わたしがはやおきましたとき。
- ・ぼくがしゅう中してべんきょうをしているとき。
- ・ぼくがはやくべんきょうをはじめたとき。
- ・ぼくが音どくをおぼえたとき。
- ・わたしがにが手なことになちようせんしたとき。
- ・ぼくがむずかしいおりがみをおったとき。
- ・わたしがおりがみをおしえたとき。
- ・わたしがせんたくものをたたんだとき。
- ・わたしがおとうとおこめときのとりのあいをしているとき。
- ・ぼくがごはんをおいしそうにたべているとき。
- ・ぼくがだきついたとき。

・わたしが「大すき」とつたえたとき。

・ぼくがいるとき。

おうちの人が「にこにこ」になる瞬間は、ほとんどが「ぼく・わたし」が関わる場面だった。子どもたちが家族に大切にされていること、その愛情に子どもたち自身が気づいていることがよくわかった。家族の「にこにこをもっと増やすことを目的に、家で自分ができることを考えて取り組んだ。

○さくせんめい「そうじ大きくせん」

○やってみることにわたしは、火よう日と木よう日におふるそうじをします。

○やってみてどうだったか:とてもおかあさんがにこにこしていました。いもうとも手つだっていました。

○おうちの人から:おふるそうじ、とてもたすかります。いつもよりうれしかぞくのじかんです。ありがとう。○おちゃんの「きもち」がうれしかったです。

あたたかい家庭の風景が浮かぶ。家族の「にこにこ」のためにやったことが、自分の「にこにこ」にもつながったことだろう。さくせん、大成功ですね。

(京都女子大学附属小学校)

**珠玉の実践記録集紹介**  
**『言葉の貯金箱』**  
 好光幹雄

「言葉を教えるというのは、手から手へ一滴の水も漏らさないように子どもに授けることです。」二十八年前、五日間、国語の先進校に研修で訪れた際に心を打たれた言葉です。ご指導いただいたのは、笠原登先生でした(川崎市立中原小学校・日本国語教育学会理事)。私は笠原学級に五日間殆どびつしり張り付いて、先生の国語のご授業や学級経営はもろろんのこと、先生の一挙手一投足の見事さに目を見張りました。毎日、毎時間が目から鱗の連続でした。この夏、吉永幸司先生から、「これ笠原登先生から好光さんへと預かってきましたよ。」と、笠原先生のご著書『言葉の貯金箱』を賜りました。ご退職されるまでの二十年間の実践の中から五十九話の笠原先生の短話を中心に子どもたちの言葉の貯金箱ノート・聞き耳文集・笠原学級文集・公開授業記録・作文・手紙等、貴重な教材や資料が随所に鏤められた正しく珠玉の一冊です。笠原先生はご自身で書の扉に次のように記しておられます。「言葉の貯金箱は子ども達に語り聞かせたへちよつといひ話」約二千話のハイライト集である。これは学級担任としての定年までの後半二十年間に及ぶ「言葉の教育実践の集大成」でもある。」

育実践は、大村はま氏にも並び称賛されるに値する非常に価値の高い実践であると思います。西の吉永、東の笠原」と称される双壁のお二人の先生に直接ご指導いただいたこと、そして今も尚ご指導いただき続けていることは、私の国語教育の在り方に大きな影響を及ぼしています。特に私の俳句指導においては、笠原先生から学んだ青空教室や教師の短話のスタイルが随所に鏤められています。

また子ども一人ひとりをステップに上げスポットライトを当てるという吉永先生と共通した笠原先生のお考えは、私の国語の授業作りのみならず、教育全般の根幹を形成しています。笠原登先生に再会できることを念じつつ、先生の「健康とご多幸、そして更なるご活躍をお祈り申し上げます。深謝。(大津市立膳所小)」。教師の短話集

『言葉の貯金箱』笠原登著・令和4年初版・印刷製本加藤文明社  
 笠原登先生 昭和十二年生  
 略歴 昭和三十五年川崎市立今井小学校赴任、平成九年川崎市立中原小学校退任  
 退任後、横浜国立大学・フエリス大学院大学講師等歴任  
 著作 『本日は晴天なり』東洋館出版社・『聞く話す指導の方法』光村図書 等多数  
 表彰 第十六回博報賞・言語表現力を高める独話活動  
 平成四年大村はま奨励賞・話ことば教育の開発 他多数  
 芸術 書の大家でもあられます。

**「本物」から**  
**獲得する語彙**  
 少徳 信

「すがたをかえる大豆」の学習をした。具体的な取り組みについてすべてを書くことはできないが、その中から「本物」から語彙を獲得していった場面を紹介する。

説明文を読むに当たって、語彙は言うまでもなく重要な要素である。その語彙を獲得する際、辞書で調べる、教わるなどがあるが、今回は「本物」を見ながら想像するという方法をとった。「いる」「に」といった説明文の語彙を、説明するのではなく本物の炒り豆や煮豆を見ながらその意味を想像する活動だ。

- T…「このお皿に、いり豆・に豆・きなこがあります。どれがどれでしょうか」
- C1…「これはきなこやろ」
- C2…「絶対きなこやな。粉やし。『こなにひく』って(教科書に)書いてるし」
- C3…「に豆ってどっち?」
- C4…「わからんけどこっちはやう?」
- C5…「なんで?」
- C6…「わからん、なんとなく」
- C7…「多分それで合ってるで。」

にるやから、めっちゃ水が多くなる。ぐつぐつする」  
 C8…「(に豆の)に」ってそういうことね。じゃあこれがいり豆」  
 C9…「なんかかさかさやな」  
 C10…「それが炒るってことやで」

C11…「かさかさにするのが、炒る」  
 C12…「そんな感じ。ずっと前、お母さんがフライパンでやってくれたもん」  
 C13…「炒るなんて初めて知ったわ」  
 このように、子どもたちは目の前の大豆の食品と向き合いながら炒るや煮るといった語彙を獲得していった。辞書を使えば、言葉の意味は簡単に知ることができる。しかし、本物を通して語彙を獲得したことによって、子どもたちはその語彙の感覚を得られたように思う。新しい言葉に触れるとき、意味だけでなくその言葉の持つ感覚をも意識できるようにすることが、本当の意味での「語彙を獲得する」ではないだろうか。言葉を辞書的な意味だけで考えず、言葉を全身で感じられるような学びを作り上げていきたい。

(彦根市立高宮小学校)

今こそ教師の出番を  
川那部隆徳

一人一端末の導入から数年が経った。今日、端末は国語科でも盛んに使用されており、様々な場での活用が進んでいる。今年度参観した七・八本の国語科の研究授業のうち、その半数以上で一人一端末のICT活用が図られていた。児童は、日常的に端末を使用しているようで、かなり使い慣れている。各々の考えの交流場面では、付箋などの機能を使いこなして、友達とのやり取りをしている。指導案もよく練られており、ICT活用の意図や仕方がはっきり記されている。

でも、これでいいのだろうか？違和感を抱き続けている。その違和感を大別すると、次の三点に集約される。  
①言葉の力が身についているのか。  
一人ひとりの子どもが、端末を活用して授業に参加しているが、やはり、文字入力への慣れによる制約もあって、比較的短い文章で、字数も少ない。そして、「うれしい」「おもしろい」などの直接的な表現が目立つ。

②本当に話し合いが成立しているか？  
考えは練られているのか？  
端末に入力された内容を読み合うことで交流を図っていることが多いようだ。しかし、読み合う状態にとどまりがちで、そこから考えが深まったり、新たに生まれたりしているのか疑問である。  
③教師の出番は適切で、役割が果たされているのか？  
教師が発問し、その返答を児童が端末に入力する。カウントしていった時間が来れば、入力をやめ、端末を通してその内容を読み合わせる。数分後、数名が感想を発表して、ふりかえりを入力し、授業が終了する。教師はそれぞれの活動の開始と終わりの指示を出すほか、各々の学習活動において個々の児童への支援にあたっている。これが、教師の仕事の大半になっている様子をよく見かけた。

これらは、端末の導入を発端に始まったことではなく、アナログ時代にも指摘されてきたことではあるが、より加速されたように感じている。それは、ICT活用を苦手とする私だから感じる違和感なのかもしれない。でも・・・。  
ICT活用は、これからの世の中、避けて通ることはできないであろうし、もう後戻りはできない

という気もする。ICTは、あくまでも道具、それらを使うことが目的ではないと言いながらも、その道具を真に有効に使いこなせているのだろうか？  
たとえば、デジタル教科書は、関連する事柄を調べたり、書きこんだ内容を訂正したりするのに便利である。でも、デジタル教科書を用いることで、負の影響をもたらすことはないかと危惧している。有効な活用を早急に検討する必要があると思う。

我々が文書を作成する際、画面上に文章を入力して、それを推敲するとき、最終的に一端プリントアウトして、紙ベースで行っていることが多い。これは慣れの問題だけではないように思う。授業では、やはり、デジタルとアナログのそれぞれの良さを効果的に取り入れることの重要性が増していると思う。  
大事なのは、これまで国語の授業で大切にしてきた、叙述に即して言葉を吟味したり、言葉の使い方を考えたりするなど、言葉の学びが保障されるような学習を、ICTを活用しながらいかに構成して、教師が授業をコーディネートするにかかっていると考える。  
先に挙げた違和感③の改善が、最優先課題ではないだろうか？  
(栗東市立金勝小学校)

編集後記

11月(二回)の提案  
(高宮小)と高木富也さん(能登川南小)の研究会が少徳信さん(少徳信さん)が育つことを大切にしようという研究テーマを元構成。研究教材「3年」が研究テーマの背景には説明文を読むこと、課題として次のことをあげてい文章を読んで「わかった」という言葉に①書かれていない内容について知って②状態③なるといいう状態。さらに、「読んでいても新しい発見がない」という課題としてから生まれたのが実践課題「重要」であった。提案内容は、「問いを深める単元構成とその実践。▼高木さんの研究主題は、「注文の多い料理店」における短編小説家活動」研究教材「注文の多い料理店」(東書・5年)提案内容は、①学び方指導と身につけるべき資質・能力②教材の特質③実践の概要。問題意識として「学び方重視で教科の資質・能力が充分達成できていないのではないか」ということからの自由進歩な「短編小説家」活動の実践を次の内容で発表した。先ずGanvanを活用した問いづくり。続いて、個別最適な学びと協働的な学びを往還する自由進歩な活動。さらに、身につけるべき資質・能力を明確にしたシート(思考力進捗表)。単元計画では、題名読み・はじめの感想・問い作りから問いの解決へと進む。自由進度学習では、単元の指導時間の3時間を設けている。▼研究協議では、「問い作り」を話題にしたから▼巻頭には、西脇悦司さんから玉稿をいただきました。  
(吉永幸司)